

Title	ガロ・プラサ著 『ラテン・アメリカにおけるデモクラシーの諸問題』
Sub Title	Galo Plaza : Problems of democracy in Latin America
Author	賀川, 俊彦(Kagawa, Toshihiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1958
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.31, No.7 (1958. 7) ,p.82- 90
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19580715-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Galo Plaza :

Problems of Democracy in

Latin America

University of North Carolina Press, 1955

ガロ・プラサ著

『ラテン・アメリカにおける

デモクラシーの諸問題』

一

ノース・カロライナ大學では例年、外國の著名人を招聘して the Weil Lectures on American Citizenship を開講、廣く政治・經濟・社會問題に關する内外知識の吸収とその普及に努めているが、本書はこの講座における前エクアドル共和國大統領ガロ・プラサの講演を集約したものである。

表題に示されたように、本書は過去一世紀にわたつて獨裁と革命の渦潮に流されるままであつたラテン・アメリカ諸國が漸くにして民主主義的政治態勢を整えるにいたつた今日、その變革過程におい

て直面した種々の問題を取り上げたものであるが、特に共產主義と諸關連の問題につき多大の關心を寄せている。著者の言葉を借りるまでもなく、ラテン・アメリカ諸國民は本來、平和愛好的性格の持主なのだが、政治的・經濟的貧困はとかくしてかれらの判斷の均衡をくずし、自暴自棄的行動に走りせ易い。しかし、政策的見地からすれば、この事實はラテン・アメリカに對する合衆國の經濟的援助ならびにアメリカ諸國の國際的經濟協力が諸國における民主主義的發展に大きな業績を殘してきたことは否定しえないまでも、そこになんらかより基本的なより、眞實にしてより、效果的なものが缺けてゐることを意味するものではないか。著者はこの點に關して、ラテン・アメリカと合衆國における價值體系や見解の比較對照に出發し、自ら大統領として實際政治に關與したエクアドル共和國における經驗を通じて、最後にラテン・アメリカの全體的視野から第十回アメリカ諸國國際會議における諸國代表の發言を引用しつつ問題を追究しようとするものである。

著者ガロ・プラサの略歴を記すならば、かれはエクアドル共和國の政界に傳統ある家系の繼承者としてニュー・ヨークに生れた。その祖先は獨立戰爭に参加し、祖父は自由主義者の故をもつて政治的迫害を受け、またかれの父もかつて共和國大統領に選ばれたことのある由緒ある家系である。El Colegio Nacional Mejía de Quito を一九二五年に卒業したかれは、ひびひび The Universities of California, Maryland and the Georgetown School of Foreign Service などに學び、一九三〇年 attaché of the Legation of Ecuador in Washington を振り出しに公的生活に入

り、キートン市長、国防長官、合衆國駐在大使などの經歷を経て一九四八年、エックアドル共和国大統領に就任した。今世紀に入つてから政情不安を續けたエックアドルは、ブラサ大統領によつて二八年ぶりにはじめて四年間の任期が成功裡に全うされ、また、かれの選舉から國民の自由選舉によつて久しぶりに軍事獨裁者からシヴィリアン大統領に代つてゐる。一九五二年その地位を讓つてからは一市政人として政界から隱退していたが、一九五六年の選舉に再出馬し、現在、再度同共和国大統領の要職にあり、過去の經驗と卓越した識見のゆえに、また純粹のラテン・アメリカ人として合衆國とラテン・アメリカの眞實の善隣關係を希う者としてアメリカ諸國間における重鎮的存在である。

著者の略歴からしてすでに明らかなように、かれは學者もしくは理論家というよりは實際政治家である。したがつて本書の内容には民主主義理論としてはかれ自身の業績に關する敘述的筆致のためか、理論構成における疎略に對して幾分かの不満を免れえない。しかし、實際政治の面から要點を確實に把握した大局の視野からの觀察には前者の不満を補うに餘りあるものがある。昨今、國際政治上、ラテン・アメリカ諸國の動向が世界の注視を浴びているが、合衆國對これら諸國の關係は他の自由諸國にとつても多大の影響がある。僅か一〇〇頁に充たぬ小冊子ではあるが、本書の内容には意外の迫力が含められており、合衆國の對外政策に良き反省の素材を提供するものと云えよう。

つきに三章からなる本書の問題點を逐章的に略述紹介しよう。

二

第一章 北アメリカと南アメリカ——比較對照——の冒頭において、著者は合衆國がその歴史を通じて具現化してきた生活の哲學、すなわち國家建設の諸原理と諸理念に基づいたわれわれの最大の秘藏財産とするデモクラシーをこの變動する世界において守るためには「われわれの知る限りの世界が保障され、破滅など考えられぬものだとの信念を捨てて、精神狀態の變更から始めねばならない」として、デモクラシーの挑戦に對する危機意識に問題の大前提を置いている。デモクラシー防衛のために、われわれは精神的價値の基礎を危うくせんとする諸勢力に對して大十字軍のような強力なる軍事的連合をしなくてはならないのではないか。こういつた問題提起から、全西半球にデモクラシーの内部的砦堡を構築しえず、また各因・無知・疾病ならびに宣傳のままにラテン・アメリカに共產主義をはびこらせ、強力な連合に代つて弱體な内容を露呈したままでおくことは、世界の指導者としての合衆國國民、自由の擁護者としてのアメリカ諸國民に課せられた役割に不忠實なことを意味するものだ。そこで、眞實にして戰闘的なデモクラシーを確保するために南北兩アメリカ相互の理解と寛容とに基づいた協力的精神をもつて、この偉業を成し遂げようではないか。兩者を區別する歴史的・經濟的・人種的・心理的そして文化的相違にもかかわらず、そこには少くとも五世紀にわたる西歐文明、歴史構造、それにわれわれすべてがアメリカノス（新大陸生れの者）という點で、それに上廻る深い同義性がある。したがつて、善隣關係に根本的に必要な理解と寛容の

精神以外に、今さら新たなかけ橋を必要とするほどの深淵はどこにも見當らない。

このような問題提起にはじまつて、著者は南北兩アメリカの比較的アプローチを試みる。かつては全く一方的に原料資源の供給者であり、工業製品の需要者であり絶好の市場であったラテン・アメリカが、その工業化運動によつてここ数十年間に著した様相を變えてきた經濟關係。カソリック教會の名の下に絶対専制政治によつて支配された植民體制からなんらの自治の經驗なくして獨立をちとつたラテン・アメリカは、獨立とともに獨裁制と混亂した社會秩序の過去の遺産をも引繼いでしまつたが、他方ヨーロッパにおける宗教的迫害から遁れ、自由と寛容の基盤の上に新しい社會を組織し、長い過程の理論的究極點としてフィラデルフィアにおいて起草された民主的憲法下に専ら發展の一途を辿つた合衆國との歴史的比較。歴史的に顯著な兩者間の相違は、しかしながら、ラテン・アメリカのデモクラシーへの意識的かつ實際的接近によつて近年とみに均等化されつつあることを示し忘れてはいない。さらに兩者の發展に關する比較で興味ある點は、兩大陸における人口比である。當初、白人がサント・ドミンゴに設營地を見出してから一二年後にビュエリタンがブルームスに到着したのであり、當時のブラジルのポーションの人口が一〇萬であるに比し、ニュー・ヨークのそれは僅か二〇〇人にすぎなかつた。合衆國獨立當時にも、ラテン・アメリカの非土着人口二〇〇〇萬人に比して合衆國は三九〇萬人であつて、十八世紀中には壓倒的にラテン・アメリカが人口の點で優つていたのである。それが十九世紀に入つてからは、一八七〇年における合衆國人

口三八五〇萬に對してラテン・アメリカは三八〇〇萬、十九世紀末には七六〇〇萬對六三〇〇萬と形勢逆轉している(一九五〇年の調査では合衆國およびラテン・アメリカの人口はともに一億五千萬、人口増加率は合衆國一・四%、ラテン・アメリカ一・九%)。この情勢の變轉に政治的安定性と地理的環境の影響が大きく支配していることはないまでもないのだが、亜熱帶的環境にある合衆國が横の移民を爲しえたに對して、廣大な熱帶地にアマゾン峽谷地帯に大きな領域をもつラテン・アメリカでは縦の移民の必要に迫られていたという點には、それが發展上の障害としていかに大きく作用したか、理論的に重視されても良からう。その他、地下資源の問題を扱つた地質的見解、交通、教育、疾病など種々の問題について論じ、これらの問題も最近数十年間における工業化の推進によつて多くの生活諸條件と平行して向上的展開を續けていることを示している。

歴史的、自然的環境の比較に加えて、一方、國際環境における心理的要素も人間關係におけるその重要性と同様、大きな比重を占めていることとして尊重せねばならない。むしろ、本書ではこの點を強調し、「すべて眞の理解は政府の諸政策に發するものではなく、國民相互の間に發しなくてはならない」として、文化的・心理的構造の相互の問題や複雑性を眞に理解することを強調している。そのため北米人のラテン・アメリカ觀とラテン・アメリカ人の見た合衆國相互の、むしろ極端から極端の諸見解を披瀝するのだが、それらをとりまとめるならば結局、北米の極端論者はラテン・アメリカをして「抽象的、人間的、そして觀念的精神の世界を夢みてうずくまつている、従順な、しかし派手好みで怠け者の劣性的混血人種の住

「土地」であるとし、他方ラテン・アメリカの北米観は「人種的偏見、極度の民族主義、物質的プラグマティズム哲學の産物であり、超自然的で快樂的生活のためにメカニカルな手段をふんだんにもつてはいるけれども、より永續的な理知的價值を樂しむことの不可能な國民……善意にして高度に専門化されてはいるが、精神的には未熟な野蠻人」だときめつけている。この二つの意見はどちらも相互の一面的觀察に過ぎないものではあるけれども、お互いの國民感情にこういつた溝が流れていることは認識しなくてはならない。

かくして、相互の基本的要素をなら失うことなくして兩者を接近せしめうる精神的交流と價值ある貢獻を將來に求めているのだが、以上の南北兩アメリカにおける價值體系や諸見解の相違ならびに類似點に關する分析を通じて、著者は次に記すような結論を導く。

(1) 種々の相違點が存在するにもかかわらず、世界中いかなる他の國家群もラテン・アメリカ諸國ほど類似點と連帶性をもつものはない。

(2) 南北兩アメリカを比較對照するに、類似點は相違點に比して遙かに量的に優つてゐる。しかも、新しい希望に溢れた生活概念において、兩者は極めて密接である。したがつて、共に新世界に住む隣人として、眼をヨーロッパのみに固定することなく、さらにお互同志を見つめねばならない。

(3) さいごに、兩者は相互依存と統合の運命にある。北米人は more world-minded, more humanistic になりつつあり、他方ラテン・アメリカ人は more pragmatic, more specialized になつてきている。われわれは、われわれ自身の人間的、自然的諸資

源を用いてこの大陸内の結束の特權を獲得すべく全力を捧げている。今や、われわれは新しい人類、新大陸の人間、新時代の主人公の誕生、それにわれわれが豫期している曙光の出現を漠視しているのだと誇張でなしにいうことができる(一九頁)。

三

第二章 エクアドル——デモクラシーにおける經驗——この章は、比較的に生活環境に恵まれているとはいへ、歴史的・政治的・社會的にラテン・アメリカの典型としても差支えないほどの紛糾混亂を續けてきたエクアドル共和國を、僅か數年にしていともデモクラティックな國家に改變せしめた著者の大統領としての諸經驗を扱つてゐる。

エクアドルは赤道直下に位置するも、その氣候條件はさほど悪くはない。これは南極海から南米西海岸を北上するフンボルト海流の恩恵であつて、豫想に反して海岸地方も炎熱ほどではない。しかも、アンデス山系を控えているために、その氣候は熱帯から寒帯にかけての地域をもち、またその國土は火山灰に蔽われた世界でも有数の肥沃な土地である。このように恵まれた立地條件が、今日、バナナ王國とまでいわれている平和なエクアドルを作りあげる大きな要因であることはいうまでもないことではあるが、歴史的、政治的にはまことに紊亂をきわめるものがあつた。獨立の祖シモン・ボリーヴァルの建設した大コロンビア共和國から、さらに分離してエクアドル共和國が誕生したのは一八三〇年であつたが、その後、軍事獨裁者による革命と無秩序の時代、平和的裝いをこらしてはいたもの

國家神權説をかざした保守主義者による封建的時代を経て一八九五年、初めて眞の國民革命が起つて徹底的政治改革が行われ、國家と教會の分離とともに一時的に自由の復活が齎らされた。しかし、第一次世界大戦後におけるファシズムの流行は、この國をも汚染し、再び軍事獨裁と革命とが循環する無秩序の時代に陥つてしまつてゐる。すなわち、一九四七年までの二三年間に、二七人の大統領が革命によつて更迭され、一ヶ月に四人の大統領と、六つの憲法を數えるなど、十九世紀中に一一の憲法を有したこの國の記録を遙かに破るほどの紛糾ぶりを示してゐるのである。およそ、このような背景のもとに、ガロ・ブラサ大統領が出現した。

無秩序のどん底——事實、ガロ・ブラサが一九四八年九月一日、大統領に就任するまでの數年間のエクアドルは革命が相續いてゐる。すなわち、一九四四年五月、總選舉を前に起つた軍事クーデターはヴァラスコ・イバルラ (Valasco Ibarra) を大統領に就任せしめ、軍部ならびに中産階級を背景としたこの政權は三年間保持されたものの、一九四七年八月二十四日、國防長官カルロス・マンチエーロ (Carlos Mancheno) 大佐の指導した軍事クーデターによつて轉覆され、イバルラは國外に驅逐された。しかし、僅か九日の天下でマンチエーロも臨時大統領ヴェイニテ・イミリーヤ (Mariano Suárez Veintimilla) に逐われ、ついでこの臨時政權も翌年六月に控えた大統領選舉を合法的に行うことを使命としたアロセメーナ大統領 (Carlos Julio Arosemena) に引繼がれた——において大統領となつたガロ・ブラサは二三年ぶりにその任期を全うし、エクアドルをデモクラシーの方向に轉換せしめるに多大の業

績を成しえたのであるが、その秘訣は何であつたか。

著者は具體的な事例を擧げて、政治的、社會的、經濟的な各分野において、エクアドルを民主主義の軌道に乗せることを可能ならしめた諸政策を披瀝しているが、要するにかれが大統領として貫いた信念は “Give the Government back to the people.” (政府は國民の踏臺たれ) ということであつたことを強調してゐる。「私は耳を大地につけて、國民が長らく主張してきたこと、空しい希望を抱いてきたことなどを聞き、かれらの希望に従つて行動することを決心した。私の最初の言葉は、國民の意思を尊重し、固く自由を遵守する旨のメッセージであつた。私は (國民の生活諸條件が) 一夜にして變る奇蹟は約束しなかつた。……むしろ將來の繁榮の基礎を築くことの困難なることを主張し……國民が國家建設のこの仕事に顧客としてではなく役者として参加することを要請した。……さいごに私は、私を選んでくれた人々の大統領としてのみならず、エクアドル國民全體の大統領であることを國民に誓つた」(三一頁)。おおよそ、民主主義を標榜してゐる諸國の元首としては、このようなメッセージをわざわざ掲げねばならぬほど陳腐なことはあるまい。しかし、これが、政治的、社會的混亂のどん底にあつた國家において、緊急避難の義務を負つた大統領の發言であり、しかも誠心誠意、國民に對する誓約を終止守り續けると同時に、一國の指導者として確固たる政治信念のもとにそれが實行されたとなると、従前のラテン・アメリカ的解釋からすればまことに貴重な發言であつたといわねばなるまい。通例として、かかる場合には軍隊を背景とした強力な獨裁政權の樹立が考えられるところであるが、「デモクラシーの諸制

限や世論の批判に關與せずに行うことは、どれほど容易であり都合が良かったか知れない。しかし、その代償は……おそらく、大量な、しかも速やかな物質的業績と引換えに、それ以上に大なる、より深い精神的犠牲であろう」(三二頁)として、あえてその道程は遠く険しくとも國家に恒久的利益をもたらすであらう方式を選んだ點に、かれの躍如たる政治的信念が窺い知られ、また同時に民主的實際政治家としての成功の秘訣が存している。

しばしば、民主主義者を裝つた偽善的獨裁は急拵えの社會計畫——結局、それは獨裁者の個人的威信を強化する究極的目的に依存するのだが——にのり出すところなのだが、かれの場合にはその必要がなかつた。とはいへ、國家の恒久的對策として必要なものには積極的に實行に着手し、經濟組織の近代化計畫をはじめ貿易の多様化、農業技術の改善、この國の歴史はじまつて以來の國勢調査、結核・マラリアに對する挑戦、さらには政府機構や諸方式など多方面にわたつて改善ならびに合理化の運動を展開したのである。この刷新的な統治方法には、ある場合には段階的に漸進的過程を踏むよう進言した人々も多くあつたほどであり、またある時には出版の自由に關する特權を利した政治的誹謗者の攻撃の矢面に立たせられたこともあつた。しかし、かれの誠意と信念は助言者をして積極的協力者に改變せしめたし、また、誹謗者に對しての寛容な態度は、かえつて根據なき誹謗に對する一般輿論や多數新聞の憤激を誘ふことになつて、自由なる出版における一定の道德的限界ならびにデモクラシーにおけるその極めて重要な役割を認識させることになつた。

かくのごとく民主主義的政府は推進され、幸いにも着々とその成

果を収めえたのであるが、通常の立憲政府は緊急事態に處するに獨裁政治ほどには效果的に對處しえぬ事實が、しばしば指摘されている。緊急事態は必然的に民主政治の限界下における迅速にして徹底的な活動を不可能ならしめる。プラサ政權時代にあつても、地方的叛亂や軍事クーデターの烽火が幾度か擧がつた事實がある。幸いにも、事態は事なく終つたが、それは「しばしば國民抑壓の武器であつた軍隊が、政治組織を堅固ならしめること以外の、それ以上のことに貢獻する新たな信頼性ある、かつ愛國的な態度をとり入れた」ためであり、「私の政權擔當中、軍隊はもはや國家ならびに憲法を守る眞直ぐな狭い道から、邪道に外れぬことを誓う機會をもつた」(三七頁)として政府と軍隊との協力關係を明らかにしている。傍ら、民主體制下にあつてもその對處法になんらの變更なきことを主張している。他方、かれの在任中、世界市場における米價の低落による經濟的緊急事態に直面した時にも、法の嚴格な限界を越えることなぐ對處しえたことを擧げ、かえつてその當時の對應策が今日のエクアドルを世界一のバナナ王國に育成し、國民の生活諸條件の改善に資するなど、經濟的デモクラシーのみならず、政治的、社會的にデモクラティックなエクアドルを築き上げることに成功したとして、第二章を結んでいる。

四

第三章 ラテン・アメリカにおけるデモクラシー——過去と將來——過去における實際政治上の諸經驗を通じ、さらにラテン・アメリカ全體としての大局的な視野からその將來にパースペクティヴを

あてはめようとするもので、一九五四年三月、ヴェネズエラの首都カラカスに開催された第十回アメリカ諸國國際會議における諸國代表の主張を要點的にとりあげ、論評を加えている。

まず、アメリカニズムによる經濟的統合を強化することに重點をおいたブラジル共和國代表ヴィセンテ・ラオ博士の演説を擧げているが、それは「ラテン・アメリカを破壊的觀念もしくは破壊的諸勢力の傳染性病菌から防衛するためには、諸國民の生活水準を人間の尊嚴に價した水準にまで高めねばならぬ」(四九頁)として經濟機構の基盤と、したがつて、社會機構の基盤を固く組織することを強調したものである。かれは、そのために「民間企業や民間資本の果す役割の重要性は充分に認めねばならないが、それ以上に高度の水準をもつた經濟政策が「時間と利益率に關して好ましい條件下に、協力的精神をもつて、しかも各國の可能性に従つて、近視眼的でなく將來を洞察しうる眼をもつて、可能な投資を通じ實行に移されねばならぬ」(五〇頁)ことを主張している。冷靜にして洞察力ある判斷に基づいた經濟政策の必要なることは、ヴィセンテ・ラオ博士の言を俟つまでもなく、およそいかなる政府にも當然のこととして要求されねばならない。にも拘らず、あえてこのことが強調されねばならなかつたことの背景には相應した理由が存在するものと考えねばなるまい。すなわち、既に安定した政權の下にデモクラシーの究極的目的に邁進している諸國に對して、かかる經濟政策の有用かつ必須なることはもちろんであるが、國家の巨大な富が外國權益下であり、しかも、それが得策上つねに獨裁者との取引を好むことからして、むしろ必然的に過激派との鬭争を卷起するような狀況にある場合

には、それはきわめて困難なことといわねばならない。

およそ、かかるジレンマに陥ることを餘儀なくされている最たるものとしてグアテマラが擧げられ、その共產主義勢力の浸透激しきがゆえに「大陸連帯の脅威」とまでいわれられているのだが、また同時に右翼反動勢力に悩んでいるボリヴィアもその例に加えられよう。著者はこれら兩國に對して、隣人としての同情的立場から、同會議における兩國代表の發言を集録している。グアテマラ外相の演説要旨は、外國資本の奴隸的狀況下にあるグアテマラは、過去における失敗の經驗からして自らの努力、資源、資本をもつて經濟的再建に、そしてデモクラシーの確立を目的しているのであつて、そこに用いられている諸手段、諸計畫は決して共產主義綱領によつては納得されえないものである。にも拘らず、國際的反動勢力はグアテマラをして「大陸連帯の脅威」と指摘して、集團的に「共產主義に對抗する高尚な計畫」という公然たる武力干渉を認めようとした。「非干渉の原則は汎アメリカ主義のもつとも無價値な業績にして、アメリカ國際間の統一、連帯および協力にもつとも無價値な基本的基盤の一つ」(五八頁)であつて、強力な帝國主義諸國は「國際法の進歩が挽きとつたもつとも強力な抑壓の武器を、勞せずして再び獲得してきたにちがいない」(五九頁)。集團の名の下に干渉を正當化せんとする卑劣な行爲に對してこのように痛烈な批判を試みたのち、汎アメリカニズムには、ラテン・アメリカが「他の高度に工業化された諸國に比較して、無知と貧困の虜囚であり、原料資源と安價な食糧の供出者として、また、かれらの工業製品の確かな市場として半植民地的依存的地位に保たれている」(六〇頁)ことを自覺した上でこの半球

の現實的諸問題に取組まぬかぎり、それは何らアメリカにおいて人間の福祉のために効果的ならしめることはできぬことを強調している。

これに對して、ポリヴィア代表は外國民間資本の投下が排他的獨占的に後進諸國經濟に注がれることの優劣を分析し、「ラテン・アメリカに齎らされた資本は、それ以上の資本を利潤という形でそこから輸出されてきたことは疑えない。……だが、借款が償還される場合には、それによつて資本財が獲得されるし……さらに將來の民間投資を可能ならしめるより、良い條件を用意するという附隨的利益をも備えしめる。したがつて、開發のためには、好ましい條件と約定のもとに、無制限な利潤の獲得を基本的目的としないかぎり、借款を認めるより他には何の解決策もないものと考えられる」(六四頁)としてグラテマラとは對照的見解を示している。また、共產主義問題について、「國際共產主義はそれが働きかけている國家的諸問題を主張し解決することには眞の關心をもたない。……ポリヴィアはそれがアメリカ内政に干渉していること、ならびに、その特徴の一つとして、それが半球の進歩的な政治、社會的運動を歪めることを目的とし努力していることを認める」として共產主義の戰術・戰略を披露して激しくこれを非難している。しかし、現代、特にアメリカに通例のことながら、それを抑制せんとしている反共產主義勢力は、かえつて國際共產主義により、以上の威信を加へまたその傳播を助けてはいないだろうか。「彈壓が反共產主義の名のもとにデモクラシーの環境を稀薄にし、社會的政治的進歩の試みが共產主義によつて教唆されているという口實のもとに暴力によつて窒息させら

れ、また勞働者の合法的な要求が社會秩序を亂す脅威を吹込む共產主義者として事業主や政府によつて制限されるところではどこでも、國際共產主義の魅力はそれと闘つていと主張する者自體の活動を通して急速に増大していることは確かである」(六七頁)。要するに、合衆國の對ラテン、アメリカ經濟協力に「善意以上の何ものか」(六五頁)を要請すると同時に、共產主義のはびこり易いような地盤、すなわち社會的不正、貧困、集團的抑壓などの諸條件を取除くことをもつて汎アメリカニズムの急務とした點で、ラテン・アメリカにおける左右兩翼の見解の一致が見られるのである。

政治的・經濟的デモクラシーの確立を目的とした汎アメリカニズムの前途に横たわる對外的諸障害、すなわち外國資本の導入、集團的内政干渉、共產主義ならびに反共產主義運動などの問題をこのような形でとり上げるとともに、ラテン・アメリカ内部において立ちだかつている先天的な政治現象にも觸れている。すなわち、通常カウディーリヨ主義 (cautillism) と呼ばれている一種の軍國主義が獨裁制の保持に果している役割を擧げ、それが結果的に國家經濟の崩壞から國政の崩壞をも免かれぬものとする、またそれが極端なナショナリズム、もしくはファシズムの出現を誘い、さらに共產主義侵略に絶好の好餌を提供するものであることなどを論證している。

かくして、最後に第十回アメリカ諸國國際會議における綜合的見解としてメキシコ外相ルイス・パデーヤ・ネルボ、およびチリー外相トビーアス・バリオス・オルティスによるアメリカ諸國の連帶、特に經濟協力の面で現實に立脚した實行力の必要性を力説した主張

を掲げ、その歸結を同年十一月、リオ・デ・ジャネイロに開催を豫定した經濟會議に委ねることとして本書に課せられた使命を終えてゐる。

五

以上で「ラテン・アメリカにおけるデモクラシーの諸問題」に関する素描を終えるが、序に述べたように、本書は民主主義理論書ではなく、實際政治の經驗に基づき、綜合的視野をもつて觀察した結果の報告であり、また問題の提起を促した書物である。そのためか、觀察内容の豊富さに多大の興味が唆られると同時に、これら後進國におけるデモクラシーの將來には深刻なものが存在していることを切實に感じさせるものがある。

著者ガロ・ブラサは、デモクラシーの發展要件として大衆の生活條件の改善、中産階級の強力化、天然資源の適切な使用、産業計畫の促進、關稅障壁の撤廢、その他大衆教育計畫など多面的な要請を試み、かつその歸結を合衆國を中心とした汎アメリカニズムを通じた連帶意識、なかならずアメリカ諸國の經濟協力に求めている。第十回アメリカ諸國國際會議は經濟會議の特別開催を決議し、それによつて、その後アイゼンハワー大統領の提案に基づいた國際財政協力機構 (International Finance Corporation) が設置され、一億ドルの援助資金が世界銀行から民間企業に貸與されることになり、さらに合衆國の對ラテン・アメリカ關稅が輕減されることになつたのは眞に同慶の極みであると云うべきであらう。

しかし、本書を通讀して考えさせられること、特にそれはグアテ

マラ代表の訴えるところに切實なのだが、技術的援助とか經濟援助などの後進國政策が、すべての現實を經濟的なものと考へて、一般大衆の心理的・政治的な事實をあまりにも無視してはいないだろうかという疑問である。この非經濟的要因を利用する點では、「人はパンのみにて生きるに非ず」をモットーとするキリスト教國、自由主義西歐先進諸國よりも、經濟的決定論者とみられている共產主義煽動者の方が役者は一枚上手のようである。ポリヴィア代表の既述した發言に「善意以上の何ものか」を要請したところに、今日、後進諸國の希求する最大のものが秘められてはいないだろうか。

昨今の自由主義陣營内部における中東諸國の紛争や、あるいはラテン・アメリカの對合衆國感情の惡化を例としても、われわれはこの點について檢討の必要を痛感するものである。本書を紹介する最後、こと合衆國の對ラテン・アメリカ政策に關する限り、經濟援助と心理的・政治的援助のバランスはきわめて不均衡狀態にあり、それがこれらの生活上の信條たるプラグマティズムに基因するとまでは云わぬまでも、單なる政策上の問題に委ねることで解決は難かしいものといわねばなるまい。

(賀川俊彦)